

豊かな暮らしがインバウンドを呼び込む

「新聞に寄稿しているフランス在住ジャーナリストと連絡を取りたいのですが」—NPO法人で活動する友人からメールが届いた。彼女の住む佐伯市は九州一面積が広く、海もあれば山もある。リアス式の海岸線は九州の海釣りのメッカだし、宮崎県境をなす祖母傾大崩山系はユネスコエコパークになるほど生物層が濃い。何より、豊かな自然を活用する達人が大勢いる。彼女が欧州型の長期滞在型観光を市に提案したところ「どうやって呼び込むの」と言われ、一念発起したという。

欧米からの訪日客を呼び込む例は大分県内にもある。竹田市は滝廉太郎の「荒城の月」で知られる静かな城下町。近年は移住者が増え、アートやものづくりをしながら暮らしている。欧米人バックパッカーの間に町の面白さがロコミで広がり、一人旅用のガイド本にも掲載された。ゲストハウスに長逗留しながら竹田の暮らしや歴史を感じ、はるか日本の地に根差した潜伏キリシタンの文化も知る。

臼杵市野津町の農村にはイスラエル人やオランダ人など欧米人の姿がある。グリーンツーリズムをしてきたお母さんたちはあくまで自然体でもてなす。とりわけ手間暇かけた有機農業や普通の家庭料理が喜ばれるそうだ。

外国人は、日本の暮らしの中にある豊かさにこそ価値を見いだす。大分も開催地となる2019年ラグビーワールドカップまで1年を切った。前回のイングランドでは1人当たりの平均滞在日数が14日間、消費額は約32万4千円。現地集合・解散する「着地型観光」がクローズアップされるが、ゲームの合間に何を提案しようか。欧米人はすぐそこまでやってくる。佐伯市にだってチャンスは大いにある。

大分合同新聞社 編集局統合編集長 佐々木稔



ソーメン流しで外国人をもてなすお母さんたち